ダニエル・タックは庭から空を観測する。昼間の空ではなく、星々が浮かぶ夜空が頭上にあった。そこにはだるまのような形の月が光り、また無数の星明かりが浮かんでいる。人工の明かりが限りなく排されたことによる恐怖に対する報酬は、満遍なく夜空に散りばめられた美しき星々だった。そこは都市でも町でも村でも集落でもなく、孤独に一軒家が建つのみだった。道路沿いに建ち並ぶ灯が、ダニエルの住む家以外から発せられる唯一の人工灯となっている。

彼は山間の平地にぽつんと建つ一軒家に父と住んでいる。しかし家に彼しかいなかった。父の仕事は金融屋で、母を早いうちに亡くしてしまった息子のために使い切れないほどの金を稼ぐのに忙しく、父は週末以外にあまりその家に帰らなかった。

ダニエルはもうそれに慣れ切ってしまっていて、夜空を観測し、それを記録に残すことに夢中になっている。慣れてしまったから空を見上げるようになったのか、空を見上げることに夢中になってしまったから慣れてしまったのかは、わからない。当人以外には。

その当人は父からの誕生日プレゼントである高性能の望遠鏡を覗くのに夢中である。

「今日は晴れ。三日ぶりの晴れ……お、エリュイ星域まで見える」

つぶやきは自分以外の誰に対するものでもなく、覗いたまま手元のノートにそうして得た情報を書き連ねていく。書かれていく文字は乱れず、きれいに並んでいく。それは数年来の練習の賜物だった。

「今回もいつも通りの……アルダ…ルマー…ボンゴ……ウジャルマンダ…そして……アース」

彼は暗唱する。口にしたのは、見えた星、もしくは何百光年と離れた場所にある宇宙空間の名前だった。それらが今日見えることは予定調和に他ならなかった。夏の晴れの日、必ずそこまで見通せるのだ。だからだろう。声色は退屈で仕方がない者のそれだった。

「――――え」

だから、月明かりの中を何かが横切ったのを見た瞬間、ダニエルは目の錯覚を疑った。

レンズの端の方に捉えていた月を正面に捉え直す。

しかし不動の夜空に動きはなく、やはり目の錯覚かと考え直そうとした瞬間。

「あ――――」

月明かりの中に円形の何かが躍り出た。それは急発進と急停止を繰り返しながら月明かりの中を行ったり来たりした。最初は流れ星か何かと考えられていたそれはどうやら宇宙にはなく、空にあるようだった。そしてそれは段々と近づいてきているような気がした。

ダニエルは望遠鏡から目を離し、2.0の数値を誇る目を空に向けた。

「……UFOだ」

期待が滲んだ声色だった。また目に退屈の色はなく、輝いていた。

未確認飛行物体は段々と高度を落とし、やがて人の住まない西方の山に落ちたように見えた。

それから一分かからない間に目を輝かせた少年は荷をまとめて暗闇の中に駆けて行った。

ダニエル・タックの胸中は希望と期待と好奇心だけに染まっていた。